

---

# ニキビ

春野天使

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ニキビ

### 【Nコード】

N2733A

### 【作者名】

春野天使

### 【あらすじ】

いがらしたくと  
五十嵐拓人彼女いない歴17年の17才。今まで振られた回数12回。拓人を振った相手は、みんな左頬にニキビが出来ていた。それは「振りニキビ」ともいう。13回目の相手にも振りニキビが出来て振られた。そんなある日、拓人のクラスに転校生の女の子が現れた。彼女には「額、顎、左頬、右頬」の四力所にニキビが出来ていた……

## プロローグ（前書き）

ニキビ占いのニキビの位置は、色んな説があるようですが、ここでは一番一般的な位置で書きました。

## プロローグ

「やだ、ニキビ出来ちゃった」

ファストフード店で、鏡を取りだし化粧直しをしていた亜実小さく呟いた。その言葉に、向かいの席でハンバーガーにかぶりつこうとしていた拓人は、口を開けたまま固まる。

中学三年生の妹沙織の同級生、亜実。沙織の紹介で知り合い、今日が初めてのデートの日だった。沙織にはいつも念を押していた。ニキビが出来てない子を紹介してくれと……

「ど、どこに出来た？……」

うわずった声で拓人が聞く。亜実は鏡をじっと見ては、しきりに顔を気にしている。額？顎？左頬？右頬？……

「ここよ、ここ。やだなあ、すぐ目立ってるでしょ？」

亜実は拓人を見ながら、人差し指で左頬の真ん中を指した。

「！……」

左頬！それって……拓人はゴクリとつばを飲み込んだ。

「薬局行こう」

拓人は食べかけのハンバーガーをテーブルに置くと立ち上がった。

「え？」

亜実はキョトンとして拓人を見上げる。

「ニキビはすぐに治さなきゃ……跡が残るだろ。特にその位置に出来たニキビはね」

「でも、今じゃなくていいでしょ。まだ食べ終わってないんだし」

「ダメだ！……その、思い立ったキツツキって言うし……」

「はあ？」

「あつ、今の面白かった？思い立ったが吉日のこと……アハハハッ」  
拓人はポリポリと頭を掻きながら、苦し紛れに笑った。笑い声が空しく響く。

「……」

亜実は白い目で拓人を見ると、軽く息をついた。

『額のニキビは思いニキビ、顎は思われニキビ、左頬は振りニキビ、右頬は振られニキビ』そんな迷信誰が言ったのだろう。もちろん、拓人はそんな言い伝えなど知らなかったし、信じてもいなかった。

しかし、何故か拓人の前に現れる女の子は、みんな左頬にニキビが出来ていた。そして、そのニキビが出来ると、いつも拓人は振られてしまうのだった。

今まで拓人が振られた回数12回。五十嵐拓人彼女いない歴17年いがらしたくとの17才。

## プロローグ（後書き）

快丈風さんのネタを元に書き始めました。

快丈風さん、面白いネタをどうもありがとうございます！イメー  
ジを壊さないよう、完結させたいと思います。初の恋愛ジャンルで、  
どうなることかと心配してましたが、書いていて楽しかったです。  
ニキビ占って本当に当たるんでしょうかね？（^^;）

## 第1話 振りニキビとの出会い

ことの起こりは、小学校6年の時。

同じクラスに七海という女の子がいた。大人っぽい雰囲気のある美少女だった。勉強も運動も出来て性格も明るい。当然クラス中の人気者で、拓人も密かに憧れていた。

そんな七海から、拓人はバレンタインデイにチョコレートもらった。バレンタインデイにチョコをもらうなんて、拓人には初めての経験で、飛び上がって喜んだ。だが、きっとそれは義理チョコでクラス中の男の子がもらったのだろうと思っていた。

けれど、クラスの男子でチョコをもらったのは、拓人一人だった。それ以来、七海とは急接近し、よく遊ぶようになった。

翌月のホワイトデイには、沙織に選んでもらったとびきり可愛いお返しの品を贈った。七海もとても喜んでいた。しかし、ホワイトデイから数日経った頃から、七海の状態が急によそよしくなっていた。

そして、例の振りニキビが七海の左頬に出来たのも、ちょうどその頃だった。もちろん、その時は、ニキビのことなんて拓人はちっとも気にしてなかった。

ある日の夕方、拓人は七海に呼び出され、近くの公園に行った。

「拓人君、わたしね、バレンタインデイの日に2人の男の子にチョコをあげたの。一つは拓人君、もう一つは大輔君っていう中学生の男の子」

「ふ〜ん」

拓人は七海が何を言いたいのか全く分からず、ただ話を聞いていた。

「大輔君は、格好良くて女の子にモテモテだし、小学生の女の子なんて興味ないって思ってたの。だから、ホワイトデイのお返しなんて絶対もらえないって思ってた」

「ふん」

「それが、もらえたのよ！しかも手紙つきで！」

「へえ……」

顔を火照らせ興奮して話す七海の様子に、拓人は次第に嫌な予感がし始めてきた。

「わたし、決めてたの。もし、大輔君からホワイトデーのお返しが来たら、大輔君とつき合おうって！」

「……」

「それで、昨日思い切って大輔君に告白しちゃった！そしたら、大輔君もOKって言ってくれたの！！」

「……」

拓人は頭を思い切り棍棒で殴られたような衝撃を覚え、もう何も言えなかった。

「あつ、拓人君も好きよ。でも、大輔君はもつと好きなの！」

これが別れ話というもののなのか？二股をかけられのか？幼い拓人にはよく分からなかったが、その日以来、七海と遊ぶことはなくなった。受験で言えば、自分はすべり止め校だったのだなあと後々拓人は思う。落ちた時のため一応受けておくけど、本命校が受かってしまえば用済み……

あの日、夕方の公園で、沈む夕日をいっぱい浴びた七海の左頬のニキビのことだけは、今でもしっかりと記憶に残っている。拓人と振りニキビのとの深い関係は、その時から始まった。

「言っちゃ悪いけど、拓人さんってちょっと変じゃない？」

拓人とデートした翌日。学校の休み時間に、亜実沙織に言った。「異常にニキビのことを気にするのよ。強引に薬局に連れて行かれて、ニキビの薬を買ったのよ」

亜実は沙織の目の前に塗り薬を差し出す。

「なんかちよつと恐かった。目が血走ってるようで……」

「そっか……」

沙織はため息をついて、亜実の左頬のニキビを見つめる。また振りニキビ……

「ニキビが出来るたびにあの調子じゃやってらんないし。なんて言うかウザイっていうかキモイっていうか、もう関わりたくないって感じ」

「そ、そうよね……」

亜実ちゃんって可愛い顔して結構きつい……沙織は苦笑いする。

「ま、顔も性格も悪くないし、あのニキビのことさえなければいい線いってただけだ。その日のうちにハッキリとお断りしたから」

「そう、相性つてあるもんね。妹の私から見ても兄貴はいい奴だと思っよ。ちよつと気弱なところはあるけど……兄貴にもよく言っておくわ、ニキビのこと気にするなって」

沙織は二度目のため息をつく。またダメだったか……これで13人目よね。今回の場合は、拓人自ら墓穴を掘ったような気もする。

しかし、昨日デートから帰って来た時の拓人の落ち込みようときたら、見ていられなかった。まるで死の宣告をされた人のように打ちのめされていた。『ニキビ』が拓人のトラウマなってしまったことに、沙織は責任を感じていた。

何といつても、「思い・思われ・振り・振られ」のニキビのことを、拓人に教えたのは沙織だった。小学生の拓人が七海に振られた日、沙織は拓人に言った。

「その子の左頬にニキビ出来てなかった？」と。その頃、沙織のクラスでは、ニキビの迷信が話題になっていて、おでこや顎にニキビが出来ている子を見つけると冷やかしたりしたものだ。

七海の左頬のニキビが印象的に記憶に残っていた拓人は、もちろん「出来ていた」と答えた。

「お兄ちゃん、だから振られたのよ。だって、左頬のニキビは『振りニキビ』だもん」

何気なく沙織が発した言葉。その言葉が拓人の頭の中で何度もフレインし、決して忘れられない言葉となった。

## 第2話 美しい兄妹愛

「また、振りニキビのせいで振られた……」

拓人はどつかりと、居間のソファに沈み込む。亜実には振られた翌日も、拓人はまだ立ち直っていなかった。

「13人もの女の子に振られて、しかもみんな左頬に振りニキビがあるなんて……これは、呪いだ。俺はニキビに呪われてるんだ」

拓人は低く呟いた。

「そんなことないって、偶然よ。ほら、ココアでも飲んで元気出して」

沙織はココアを入れたマグカップを拓人に差しだし、拓人の隣りに腰を下ろす。

「13回も偶然が続くことってあるのか？」

「……あるかもしれないじゃない」

沙織はひきつった笑顔を浮かべながら、マグカップのココアをすすする。

「兄貴はねえ、ニキビのこと気にしすぎるからいけないんだよ。『振りニキビ』だなんて迷信なんだから、忘れちゃいなさいよ」

「そう簡単に忘れられるか……」

拓人は深くため息をついて、フーフーしながらココアを口に含む。

「はぁ……この先も俺はニキビの呪いを受けて振られ続け、一生彼女が出来ないんだろうなあ……」

「そんなことないって。拓人は小さい時から女の子に人気があるって涼ちゃんも言ってたよ」

「涼が?……」

吉澤涼は、拓人と同じ学校に通う同級生で、拓人の幼なじみだった。そして、今では妹沙織の彼でもある。涼のことを話題にするだけで、沙織はいつも笑顔になる。

「いいよなあ……お前等ずっとラブラブで」

小さい頃から家に遊びに来ていた涼と沙織がつき合うようになるのは、自然な流れだ。涼と沙織は仲のいいお似合いのカップルだと思うが、幼なじみと妹にずっと先を越されているようで、拓人は焦りにも似た気持ちになる。

「あいつのどこがいいんだ？」

「涼ちゃん？」

沙織は満面の笑みを浮かべる。

「明るくて優しくて面白くて、笑顔がキュートなところ！」

「笑顔がキュート……」

拓人は沙織の言葉を単調に繰り返す。拓人から見れば、ただの間抜けな笑い顔にしか見えない。

「でしょ？ 私より年上だけど、なんか可愛いだよ」

「……可愛い」

あいつは母性本能っていうのをくすぐるタイプなのか？

「可愛い男っていうのもモテんのか？」

「そりゃそうよ。わたし、兄貴も結構可愛いと思うよ。なんか、守ってあげなきゃって気持ちになって」

拓人は思わずココアを吹き出しそうになる。誉められているのか喜んで良いのか？ 拓人は複雑な心境だった。

「……で、その、お前等付き合い始めて一年以上になるけど……どうなんだ？」

拓人はさりげなく、気になっていることを聞く。

「どうなんだって？ 何が？」

「いや、その……中学生には早いよなあ」

拓人は一人で顔を赤くしながら、照れ笑いする。

「何？どこまで進んでるかってこと？ お互い好きなんだもん、キスくらいは経験あるわよ」

沙織は笑顔であっけらかんと答え、拓人は手に持っていたマグカップのココアをこぼした。

「！……」

キス！キス？キス…… 高校生の俺はキスどころか、女の子の手を握ったことさえないのに…… 拓人は動揺する。涼の奴め…… 拓人は一段と『振りニキビ』を呪った。

「でも、キス止まりね。それ以上の経験はまだいいわ」

「あ、あ、当たり前だろ！そんなの……」

拓人は声をうわずらせ、顔を赤らめる。

「もし涼がそれ以上の変なことしてきたら、投げ飛ばしてやれ」

沙織は小学生の頃から柔道を習っていて、今は初段の腕前だ。もともと体の弱かった拓人と一緒に始めた柔道だったのだが、拓人は習い始めて半年も続かなかった。

「そんなことしたら涼ちゃん骨折っちゃうかも」

沙織は明るく笑った。電車内の痴漢を何度も現行犯で捕まえ、警察に感謝状までもらった沙織だから、本当にそうなるかも……と拓人は思った。

「とにかく元氣出して。『振りニキビ』のことでは、私もすごく責任感じてるんだから。ニキビの出来てない女の子なら、いつかニキビが出来ちゃう可能性あるじゃない。……いっそ、顔中にニキビのある子なんてどう？」

「……」

こいつ、他人事だと思って…… 拓人は沙織を横目で睨む。

「冗談だよ、冗談。でも、四力所にニキビがあるなら、どうなるんだろうね」

沙織はハハハと笑った。やっぱ他人事じゃねえか、こっちは真剣に悩んでるのに…… 拓人は黙ってココアを飲んだ。

### 第3話 顔の四力所にニキビのある女の子

翌日。

拓人はいつものように高校に登校した。高校生活も半分終わってしまったというのに、拓人にはこれといって楽しい思い出もなかった。思い出と言えば、『振りニキビ』が原因で振られたことばかり。それがこれからも続くのだろうか？……拓人は暗い気持ちになり、フーッと息を吐いた。

「なに朝からしけた顔してんの？」

鞆を抱えた涼が、拓人の前の席に勢いよく飛び込んできた。いつもながら、朝から浮かれた顔をしている。脳天気な奴め……拓人は涼の顔をじっくりと見つめる。これが、沙織の言っていた『キュートな笑顔』か？そして、この唇が沙織の唇と……拓人は思わず自分の口を押さえた。

「何ジロジロ人の顔見てんだよ。気味悪いいなあ……お前、また振られたんだって？」

「！……関係ねえだろ」

沙織のお喋りめ！拓人はムツとする。

「もしかして女の子には懲りて対象を男に移したとか？」

涼はククツと笑う。

「あつても俺、男には興味ないんで。可愛い彼女もいるし」

「チツ、うつせーな。誰がお前なんかに興味あるか」

「フツ、でも考えように寄れば、お前は良いよな。たくさんの女の子とつき合えて。俺なんか沙織ちゃん以外の女の子とつき合ったことないし」

「沙織じゃ不満だって言うのか？」

「まさか、まさか。俺は沙織ちゃん一筋だから」

涼のデレーとした幸せいっぱいの笑顔を見て、拓人はますます暗い気持ちになる。

「……はあ、キスだつてもう経験済みだもん……」

「え？何だよ。お前等仲の良い兄妹って言つても、そんな話までしてんのか？……滅多なこと出来ねえじゃん」

「キス以上の経験なんか絶対許さないからな」

「お前は沙織ちゃんの親かよ……ま、それは置いて、いつかダブルデートとかしてみたいよな。雪のグレンデ、初めての甘い夜！」

他の世界に飛んで行つてしまいそうな涼を見つめながら、拓人はまたため息をつく。

「それには、お前の彼女が必要なんだから、頑張れよ！」

涼は、ぼーとしていた拓人の頭を小突く。

「テツ……」

拓人が頭をさすっていると、クラスの男子生徒が教室に駆け込んできた。

「おい、転校生だぜ！」

その声と共に、教室中が騒ぎ始める。

「男？女？」

「女だよ。女！スゲー可愛い子みたいだぜ！」

クラス中の男子が沸き始める中、拓人はぼんやりとした頭でまだ頭をさすっていた。もう自分彼女なんかいない……勉強に集中していよう、拓人は心の中で決心を固めていた。

「五十嵐の隣りの席が空いてるから、とりあえずあの席に座ってくれ」

拓人は一時間目の数学の教科書に見入っていた。担任が転校生を連れてきて、自己紹介

をしていたような気がするが、全然聞いてなかった。

「おい、五十嵐、今日は佐藤に教科書を見せてやれ」

「え？……佐藤？」

拓人は名前を呼ばれようやく顔を上げた。

「初めまして！佐藤舞です。よろしくお願いします」

拓人が見上げたすぐ先に、転校生佐藤舞の顔があった。ニッコリと微笑む、整った美形の顔……

「あっ！！……」

拓人は思わず大声を上げて立ち上がった。その拍子に、少し頭を下げていた舞の頭に思

い切り頭をぶつけてしまった。ゴツンと鈍い音がして、舞は後ろによろめいた。

「痛っ……」

おでこを拓人の頭とぶつけ、舞は顔をしかめておでこをさすった。「あっ、す、す、すみません」

拓人も頭をさすりながら、頭を下げた。

「五十嵐何やってんだ。美人の転校生に見とれていたのか」

担任の言葉に教室中が沸く。前の席の涼も振り向いて笑っていた。

拓人は顔を赤らめすぐに着席する。

「こちらこそ、ごめんなさい」

舞は怒っている風でもなく、また顔に笑みをたたえて拓人の隣りに座った。

「……」

確かに舞はつい見とれてしまうくらい美人だった。しかし、拓人がもつと注目していたこ

とは、舞の顔に出来ているニキビのことだった。昨日、沙織が冗談で言っていた言葉がよみがえる。

『四力所にニキビがあるなら、どうなるんだろうね』……拓人はもう一度チラリと舞の

顔を見る。舞の顔には四つのニキビが出来ていた。一つは額に一つは顎に一つは左頬に、

そしてもう一つは右頬……まさに、舞は顔の四力所にニキビがある

女の子だったのだ。

## 第4話 妹の誘い

「はい、ホンキ！」

涼は携帯カメラのボタンを押す。授業が終わった後も、机をくつつけ肩を並べて教科書

に目を落としていた拓人と舞は、同時に顔をあげた。

「なんだそれ？」

「あれ？知らねえの？今は『はい、チーズ！』でも『1たす1は！』でもなくて、『はい、

ホンキ！』っていうんだぜ。その方が良い笑顔になるんだってさ。じゃもう一枚」

拓人と舞が携帯に注目しているすきに、涼はもう一度カメラのボタンを押す。

「OK！」

涼は素早く携帯を操作する。

「何やってんだよ」

「送信完了！今、沙織ちゃんに写メール送ったとこ」

「何の？」

「お前と舞ちゃんに決まってんだろ。すげー良い雰囲気。お似合いだからつき合っちゃえよ」

涼は屈託なく笑う。

「いきなり馴れ馴れしいんだよ、お前は。佐藤さんとは今日知り合っただけなのに」

「…… あっ 良いです」

舞は少し照れて微笑む。

「名字より名前で呼ばれた方が親しみがあつて。私まだこの学校のこと何も知らないし、知り合いもないから……」

「じゃ、まずは友達からってことで！舞ちゃん彼氏いるの？」

「いません……」

「ラッキー、俺に彼女がいなかったら立候補したいとこだけど、今回は拓人に譲ってやる

よ」

「……」

涼の奴余計なことを……拓人は明るく笑う涼を睨む。彼女は作らないと決めたばかりな

んだからな。しかし、拓人は舞のことが気になっていた。舞のことというより、舞の四つ

のニキビのことが……もし、舞とつき合ってみたらどうなるのだろうか？

「ね、いい雰囲気だろ？」

学校から帰って来た沙織の携帯電話に、さっそく涼から電話が入ってきた。沙織はもう

拓人と舞のツーショットを確認済みだ。

「うん、良い感じ！舞さんって言うの？美人で落ち着いた感じの人ね」

「そう、そう。言葉使いも丁寧だし、お金持ちのお嬢様って感じ。何て言うか、ぼわんと

した感じが拓人に合ってると思う」

時々ぼーっとして何考えているか分からない拓人のことを思いだし、沙織はクスクスと

笑う。

「兄貴にはおっとりタイプが良かもね。ほのぼのしてていいわ」

「だろ？会った瞬間から良い感じだったんだよ。運命の出逢いってやつ？」

「失恋の後の運命的な出逢いね！なんかスゴイ、ドラマチック」

沙織が涼と笑い合っていると、部屋のドアが開いて拓人が入って来

た。

「ただいま」

「あ、噂をすれば……兄貴が帰って来た」

沙織は拓人と目を合わせニヤリと笑う。

「あ、うんうん、分かった」

沙織は携帯電話を持ったまま、部屋を出ていった。

「……」

なんだあいつ……涼が送った写メールのことで話てんだな。拓人が考えていると、沙織がまたすぐに戻って来た。

「拓人お兄ちゃん」

「……何だよ」

甘えた声で『拓人お兄ちゃん』何て呼ぶ時は、何か魂胆があるんだよな……拓人は警戒

した目で沙織を見る。

「今度の土曜日あいてる？」

「……予定なんか入ってるわけないだろ。俺はいつも暇なんだから」

「良かった！一緒にケーキ食べに行こうよ。新しく出来たカフェすぐくケーキが美味しいんだって」

「涼と行けばいいじゃないか。俺、ケーキ苦手だし」

「だから、涼ちゃん予定入ってて行けないんだよ。たまには兄妹で行ってもいいじゃない。

ね、お願い！」

沙織は両手を合わせ、円らな瞳をうるうるさせて拓人を見つめる。頼み事をする時は、

可愛い妹の姿を最大限アピールする沙織。妹に甘い兄を充分心得ているのだ。拓人はいつ

も沙織の頼み事を断れない。

「……しょうがないなあ」

「やったあ！そのお店コーヒーも美味しいから」

俺はコーヒーだけ飲んどけてことか……拓人は軽く息を吐くが、たまには沙織と出か

けるのもいいなと思う。沙織と涼がつき合うようになってからは、2人で遊びに行くとい

うことはなくなっていた。

「帰りに映画——」

「ありがと、兄貴！」

『帰りに映画でも観て帰ろう』という拓人の言葉を待たずに、沙織は慌ただしく部屋を出ていった。もう『お兄ちゃん』から『兄貴』に呼び方が変わっている。沙織のテンポの速さに時々ついていけない拓人だった。

## 第5話 ケーキの美味しいカフェ

次の土曜日。

沙織は朝早くから起きて、服選びとおしゃれに時間を割いていた。柔道で体を鍛えているだけに結構筋肉質な沙織だが、おしゃれな服を着るとスリムに見える。着やせて見えるが、本人は、骨太なところを気にしていた。遅いな沙織……おしゃれには興味のない拓人は、早々と支度を済ませていた。2人で出かける時は化粧もせず服も普段着なのに、今日は念入りにマスカラまでつけている。

まるでデートの前みたい……デートかあ。女の子はデートの前には色々気を遣っているんだな。今日は沙織とデートする気分で過ごしてみようか。

拓人がぼんやりと考えていると、ようやく沙織がやって来た。

「遅くなっちゃった、ごめんね……」

突っ立っている拓人を沙織はジロリと見つめる。

「兄貴、その白いパーカーやめてブルーのジャケット着てきなさいよ」

「え？いいだろ、これで。ケーキ食へに行くだけだし」

「ダメダメ。出かける時はちゃんとお洒落しなきゃ。髪ももっとピシッと決めてきて」

「いいよ」

「良くない！」

沙織は強引に拓人を部屋に連れて行き、手早く髪の設定と服の着替えを行った。

「うん、ずっと良くなった」

沙織は鏡に映る拓人の姿を見て、ニコリと笑う。

「たかがケーキ食へに行くだけなのに、面倒くせえな……」

拓人は、沙織がスプレーで固めた髪のをツンツンと触ってみる。「何言ってるの。いっどこでどんな出会いが待っているか分からない

いのに。身だしなみはいつもちゃんとしてなきゃ」

「もういいよ、出会いなんて。俺、当分彼女なんかいないから」

「そんな弱気になってちゃダメ！兄貴は何でも諦めが早いんだから」

……13回も振られ続けりゃ諦めたくもなるさ。拓人は鏡の中の自分を見つめる。だが、何に対しても自信のないところは自分でも認めている。柔道も途中で挫折し、高校受験にしてももつとレベルの高い進学校を受けられたはずなのに断念してしまった。弱気で諦めの早いという欠点は解っていた。

予定していた時間より少し遅くなって、拓人と沙織はカフェに到着した。『ラ・メール』という名の新しく出来た店は、ブルーを基調とした落ち着いた雰囲気のカフェだった。

「あ、良かった……」

沙織はキョロキョロと店内を見渡す。

「何が？」

「え？……お気に入りの席が空いていたから」

沙織は拓人の腕を引っ張って、店外の席に連れて行く。

「お気に入りって、沙織ここに来るの初めてなんじゃないのか？」

「ああ、友達に聞いたのよ、通りに面した外の席が良いって。今日なんてすごく気持ち良いでしょ」

外の席は陽が降りそそぎ、穏やかな風が吹いていた。

沙織は慣れた様子でさつそくボーイに注文する。

「兄貴のケーキも注文したから。一番甘くないのにしたよ」

「って、お前何個注文したんだよ」

拓人にはよく分からないケーキの名前を、沙織は4つくらい言っていた。

「いいの、いいの。ここのケーキって小さいから何個でも食べられちゃう」

「……」

沙織は笑いながら腕時計に目をやった。

「本当に初めて来たのか？」

「なんだか何度も来ているような感じだな……」と拓人は沙織を観察した。

しばらくすると、ケーキ4個とコーヒー1杯が運ばれてきた。確かにケーキは小さい、大口開けたら一口でもいけそうだ。

「わあ、美味しそう！え」と、兄貴のはコレね」

沙織はブルーベリーののった渋めのケーキを拓人に差し出した。

「あまり甘くないから」

そう言いながら、沙織はまた腕時計をチラリと見る。

「沙織は飲み物注文しなくていいのか？なんかさつきから時計ばかり気にしてるな」

「え？そうかな？」

沙織は拓人を見て微笑むと、バックから携帯電話を取り出してメールのチェックをする。

「……食べないのか？」

「うん、ちよつと待つて……」

メールを打ちながら「遅いなあ」と小さく呟く。

「あ、良いよ兄貴先に食べてて」

「……」

ケーキ好きの沙織がケーキを目の前にしてそんなことを言うのはおかしい……いつもなら食べるなど言われても食べているはずだ。

拓人が不審に思い始めていると、沙織の携帯からメールの着信音が鳴る。沙織はすぐにチェックすると、ホッとしたように笑った。

「やつと来た」

「え？……」

店の入り口の方に目を向ける沙織につられ、拓人も振り返る。

「よっ！お待たせ！」

「……」

いつもの脳天気な笑い声と共に、涼が近づいて来る。その涼の隣には舞がいた。



## 第6話 お見合い？

「わぁ上手そうなケーキだな」

涼はテーブルの上に並んだケーキに見入る。

「なんでお前がここにいるんだよ？しかも、佐藤さんと……」

拓人は舞に視線を移す。舞は少しはにかみながら微笑んだ。

「兄貴、佐藤さんなんて呼び方堅いよ」

沙織はそう言っサツと席を立ち、舞の方を向く。

「初めまして、五十嵐沙織です！兄がいつもお世話になってます」

「あ、初めまして、佐藤舞です」

「舞さんって、写真で見るより美人ですね。どうぞ、座ってください」

沙織はニツコリと笑って、自分が座っていた席を舞に勧める。

「ありがとう」

「どうということ？……」

目の前の席につく舞を見ながら、拓人は呟く。

「こういうこと！じゃ、後は若いもんだけに任せてと、俺達は退散しようか」

「うん！行こ行こ。涼ちゃん遅いから映画の時間に合わなくなっちゃうよ」

沙織は涼の腕を取る。

「ちよつと待ち合わせに時間がかちゃって。今度またここに来ような」

沙織と同じくらいケーキ好きの涼は、後ろ髪を引かれながらケーキを見つめる。ケーキ好きの2人が、新しく出来たケーキの美味しい店に今まで来たことがないというのは、どう考えてもおかしいと、今更ながら拓人は気づいた。

「うん、なんかここのケーキって何個でも食べられちゃうから恐いよね」

ウソがばれても沙織は屈託なく笑う。

「じゃ、兄貴頑張って！」

「……」

拓人は、楽しそうに笑いながら去って行く2人の後ろ姿を見つめた。何？コレってお見合い？……拓人は視線を舞に移す。舞は黙ったままニコニコしていた。

舞と出会ってまだ数日だが、舞は控えめで優しくいつも微笑んでいる、温かい雰囲気をする少女だった。まだ好きっていう感情はないけれど、嫌いなタイプではない。

沙織と涼の強引なセッティングではあったが、このまま舞とつき合ってみるのもいいかな？と拓人は思った。そして、何より気になるのは舞の顔の四つのニキビだ。

「……沙織ちゃんって明るくて元気な妹さんね。吉澤君も面白いからお似合いのカップルね」

2人が去り急に静かになった後、舞は口を開いた。

「涼はバカなだけだよ……あ、飲み物何か飲む？」

「……じゃ、紅茶にしようかな」

舞は目の前のケーキを眺める。

「あの、ケーキは好きなの？沙織が3つも頼んだけど、いくら小さいったって多すぎるよね」

拓人は手を挙げてボーイを呼びながら笑った。舞は首を振る。

「うっん、私ケーキ大好きだから……何個でも食べられる」

「そう……じゃ、俺のもあげるよ」

沙織が選んだブルーベリーのケーキを拓人は舞の方へ押しやった。出来ればケーキは食べたくない。

「あ、でも……」

舞はうつむいてモジモジと手を弄んだ。

「……」

口べたなところも自分の欠点だなと拓人は思う。涼は次々と話題を見つけ、面白い話をし、場の雰囲気を明るくする。その点だけは、

涼のことを感心していた。拓人が無理に面白いことを言おうとしても、かえって場がしらけてしまうのだ。

「……私、甘い物食べるとすぐにニキビが出来ちゃうから……」  
「ニキビ?……」

舞は顔を上げて恥ずかしそうに笑った。思わず拓人は舞の顔のニキビに注目した。額に一つ、顎に一つ、左頬に一つ、右頬に一つ……四角形の線を結ぶように、小さくニキビが存在している。

「おかしいでしょう、私のニキビって……」

「う、ううん！全然おかしくないよ……その、チャームポイントになってるっていうか」

「薬をつけてもなかなか治らないの」

「え?……良いと思うよ。その可愛くて」

もし、左頬のニキビ以外治ってしまったら『振りニキビ』だけが残ってしまう……拓人は苦笑いした。

「そうかな……そう言ってくれると嬉しい」

舞はフツツと笑うとケーキを引き寄せた。

「じゃ、せっかくだから食べちゃうね」

舞は美味しそうにケーキを食べ始めた。素直な舞に、拓人はホツとする。舞となら付き合っていけるかもしれない、拓人はそう思い始めていた。

## 第7話 舞のメール

「ね、あの後2人でどこ行っただの？」

風呂上がりの濡れた髪をタオルで拭きながら、沙織が言った。

「え？」

拓人は居間のソファで熱心にメールを打ち、上の空で返事する。

「舞さんにメール？」

「え？……まあ」

ようやくメールを打ち終わり、拓人は顔を上げる。沙織は微笑みながら、拓人の横に座った。

「なんか良い感じね。兄貴、顔がにやけてるよ」

「そんなことないさ」

と言いつつ、拓人も自然と笑顔になる。

「やったね、これでニキビの恐怖からも解放されるよね」

「ニキビ……あのな、舞さん」

沙織に舞のニキビのことを言おうとして拓人はためらった。……

もうやめた。ニキビなんか関係ないんだ。どこに出来ていようと、

四力所に出来ていようと……

「舞さんがなあに？」

「……いや、別に」

拓人の携帯から着信音が鳴り、拓人は携帯をチェックする。沙織は携帯を覗く。

「何て書いてきた？」

「お前には関係ないだろ」

拓人は沙織をかわして、ソファから立ち上がる。沙織はフツツと笑う。

「兄貴、今年のクリスマスは四人でスキー場に行こうよ！」

「四人で？」

「私と涼ちゃんと舞さんと兄貴。今日、涼ちゃんと一緒にクリスマス

スのスキーツアーに申し込んできちゃった。夜行バスで行って、ペンションで一泊するの」

「申し込んだって、お前ら勝手に……」

「だって、早くしないと予約取れないでしょ。いいじゃない、兄貴と舞さんだって良い雰囲気なんだし、パパとママにも良いって言っただから。ね、いいでしょ？」

「まだわかんねえよ、そんなの……」

「あつ、兄貴何赤くなってるの？一泊するっていつても部屋割りには兄貴と涼ちゃんが一緒だからね、勘違いしないでよ」

「！そんなの当たり前だろ」

言いながら拓人の顔はますます赤くなり、沙織は笑う。

「ね、行こうよ！」

沙織は拓人の腕をとる。

「……」

「兄貴が行かないなら、私と涼ちゃんだけで行っちゃうから」

「そんなの絶対ダメ！……」

沙織が拓人の顔を下から覗き込んでニツと笑っている。また、沙織のたくらみに負けてしまった……でも、それもいいかな？と拓人は思う。

舞からのメールを思い出し、拓人の心はほんわりと温かくなる。

『今日は楽しかったです。ありがとう。また、一緒に図書館に行きましょう。お休みなさい』

## 第8話 幸せ

月曜日の朝。

拓人がいつもの電車に乗りドア付近に立っていると、涼が慌てて駆け込んできた。ピーという駅員の笛の音がして、涼が電車に乗ると同時にドアは閉まった。

「今日は早いな」

涼はいつも、拓人が乗る電車の一つか二つ後の電車に乗っている。当然、学校に到着するのもギリギリになる。

「みたいだね。赤信号に全然かかんかったせいかな？今日はラッキーデイかもしれないな、俺！」

「幸せだな、お前って……」

朝からテンションが高く満面笑顔の涼を見て、拓人が呟く。こいつに悩みなんてあるんだろうか？……

「幸せ？もっちゃん幸せだよ、俺。『幸せは自分の心が決めるもの』だよ拓人君！」

「……もう一つ早い電車に乗れば良かった。なんか、お前とは波長合わねえ……」

拓人は軽く息を吐く。だけど、子供の頃からずっと涼と連んでいるのは何故だろう？拓人には疑問だった。

「朝から暗い顔していると、幸せは逃げていってしまうのだよ、拓人君！」

涼は声を上げて笑う。

「で、お前、昨日も舞ちゃんとデートしたの？」

「え？……昨日は会ってないよ」

「なんで？押しが甘いなあ拓人は。じゃんじゃんアプローチしなきゃ。俺なんか暇さえあれば、沙織ちゃんを誘うけど……日曜は沙織ちゃんの柔道の稽古があるから会えなくてさあ……俺も柔道習おうかな？」

「お前には無理無理。舞さんには学校に行けば会えるんだからいいじゃないか」

「ふ〜ん……佐藤さんから舞さんになったか、一步前進だな」

涼は意味有な視線を拓人に送る。

「余裕だよな。もう心は繋がっているとか？信頼関係が出来てるわけだ」

「そんなんじゃないよ……」

ふと拓人は舞の顔を思い浮かべ、顔が熱くなる。

「いいねえ〜これでクリスマスツアーはばっちしだ！頼んだよ、拓人お義兄さん」

「誰がお義兄さんだ」

「近い将来、拓人が俺の義兄さんになるかもしれないじゃないか」  
「絶対、ありえない！」

クスクス笑う涼から視線を外し、拓人は窓の外に目を向ける。クリスマスツアーか……クリスマスを好きな子と過ごす、ということに拓人はずっと憧れていた。本来のクリスマスはそんな風習はないはず、キリスト様の誕生を祝う日だ、と自分に言い聞かせてはいたが、恋人と2人だけのクリスマスを過ごしたいという気持ちは、拓人にもあった。

今年こそは、大切な恋人とクリスマスを過ごせるかもしれない……  
…そう思うと拓人の心は弾んでいった。

涼と一緒に教室に入って行った拓人を、席に着いていた舞は微笑んで迎えてくれた。

「おはよう」

「あ、おはよう……」

舞の柔らかな笑顔を見ると、拓人も自然と笑顔になる。口笛を吹いて冷やかす涼を無視して、拓人は舞の隣りの席に座った。

「土曜日は楽しかった。図書館にまで付き合ってくれてありがとう」

「あ、いやこちらこそ……俺も図書館好きだから」

「本当に？良かった。五十嵐君も本が好きなの？」

「うん、まあまあ、そんな読書家じゃないけど。あの図書館の静かな雰囲気が好きなのかも。試験期間はよく図書館で勉強しているし」「そうなの？私も図書館好きよ。私たちって気が合うのかもしれないわね」

舞はフツツと嬉しそうに笑った。そんな舞を見ていると、拓人も幸せな気分になる。涼が言ってた『幸せ』ってこういう気分なのかな？と、拓人はふと思う。

俺、舞さんのこと本気で好きになりそうだなあ……拓人は幸せ気分をかみしめる。

## 第9話 下校デート？

「あの、途中まで一緒に帰ろうか……」

授業が終わった後、荷物をまとめている舞に拓人は声をかけた。舞とは帰る方角が違ったため、残念ながら駅でお別れだ。

「うん、帰りましょう」

舞は快く返事をして、立ち上がった。

「いいなあ、下校デートか」

並んで教室を出る拓人と舞の後から、涼がついてくる。

「憧れちゃうね。来年沙織ちゃんもここに入学して来ないかなあ」

「来ねえよ。沙織は柔道の有名校に進学予定なんだから」

拓人は後ろを振り向いて言う。

「ついてくんな」

「ハイハイ、邪魔者は退散します！」

「あつ、吉澤君も一緒に帰りましょ」

舞は立ち去ろうとする涼に優しい言葉をかける。

「舞ちゃん優しいな。でも、今日は遠慮しとくよ、バイトあるから。クリスマスツアー代とプレゼント代稼がなきゃ！またね！」

涼は舞に手を振って、笑顔で去って行く。そう言えば、まだ舞にツアーのこと話してなかった。拓人がぼんやり考えていると、

「吉澤君はいつも元気ね」

舞が微笑みながら言った。

「え？……あ、まあね」

涼の後ろ姿を目で追う舞に、拓人は少し嫉妬する。涼はいつも笑顔だもんね……暗い顔していたら、幸せも逃げていつてしまうのかなあ……いつもテンション低めの自分に悔いる。だが、無理にテンションを上げようとしても、滑ってばかりだ。

「あの、舞さんは、吉澤みたいなのりの良い奴がタイプ？……」

校庭まで出たとき拓人は舞に聞いてみる。

「……」

舞は黙っていた。あつ、俺まづいこと聞いたのかな？

「あの……」

「五十嵐君は、部活とかバイトとかしてないの？」

「え？」

舞は突然別な質問をしてくる。拓人が舞の方に目を向けると、舞は校庭で練習を始めたサッカー部の方をじっと見つめていた。

「うん……特にやりたいことが見つからなくて」

拓人は軽く息をつく。つまらない奴だよなあ俺って……

「舞さんはサッカーが好きなの？」

真剣な表情でサッカー部に見入っている舞に、拓人は聞く。

「……うん、何かに夢中になっている姿って素敵ね」

「そうだね……」

クラスの何人かもサッカー部に入っている。確か、健と達也だった。舞に感心されているサッカー部の連中が、拓人には羨ましかった。サッカーか、俺はスポーツが苦手なものな。

「五十嵐君は、夢中で勉強しているところが素敵よ」

突然拓人の方を向いた舞は、微笑んでそう言った。

「え？そうかな？」

「うん。頭良いし落ち着いているし素敵だわ」

拓人の頬がポツと染まる。舞が誉め上手な性格だとしても、拓人は素直に嬉しい。俺って単純だ……舞の微笑みと誉め言葉で、拓人の嫉妬心はいっぺんに消え去った。

## 第10話 密かな期待

図書館前に並んでいる銀杏並木の銀杏は、日増しに濃い黄色になってきた。時折、ハラハラと銀杏の葉が落ちてくる。晴れてはいるが、日差しはめっきり弱くなってきた。

確実に秋は深まり、すぐ後に冬が待機している気配がする。

土曜日の午後、拓人は舞と図書館に出かけた。一緒に宿題もして静かにゆつくりとした時を共に過ごした。

「あの、今度は遊園地とか行ってみようか?……」

図書館からの帰り、拓人は落ちてきた銀杏の葉をサクツと踏んで言った。

「え? 遊園地?……」

ぼんやりと歩いていた舞は、ふと立ち止まる。

「五十嵐君、行きたいの?」

「え? その、女の子はそういう所に行きたいのかと思って……沙織もよく行ってるし」

今まで付き合った女の子に拓人もよく付き合い合われてきた。無理して絶叫マシンにも乗ったが、そのたびに気持ち悪くなっていた。「俺は過激な乗物は苦手なんだけど、乗れるのは観覧車くらいかな」拓人は頭を掻きながら、小さく笑った。

「私も遊園地の乗物は苦手よ。高い所もダメだから観覧車にも乗れないの。だから、遊園地に行ってもちっとも面白くなって」

舞はそう言って微笑んだ。

「そうか、よかった。じゃ、今日はこれからどうしようか?」

時計の針は午後二時を少し回ったところ、まだ帰るには早いかなあと拓人は思った。今までの場合、いつも女の子が行きたい所について行き振り回されるという感じだった。だが、舞は自分から何も要求して来ない。

こんな時、男の方が色々デートのコース考えてないとダメなんだ

よなあ……もつと計画しておけばよかったと拓人は思う。

「五十嵐君の行きたい所でいいわよ」

舞はそう言っと、また歩き始めた。

「あ、うん……」

一瞬遅れて拓人も後に続く。それきり、しばらく黙々と歩く。そよそよと吹いてくる秋の風が、頬にヒンヤリと冷たかった。舞は口数が少ない方だけど、なんだか今日はもつと少ない。時々何か考え事をしているように黙り込んでしまう。

体調悪いのかな？それとも悩み事？なんか元気ないような……

「もしよかったら、五十嵐君の家に行ってもいい？」

突然、舞が拓人の方を見て言った。

「え？……」

拓人は驚いて立ち止まる。両親は仕事に行ってるからまだ帰っていない。沙織は拓人が出かける時まで寝ていたけど、涼とデートに出かけたかもしれない……今、家には誰もいないのかも……

「あつ、良いのよ。突然お邪魔するなんて迷惑なものね……」

舞はそう言っと、歩いて行く。

「あ、そんなことないよ。良いよ、うちにおいでよ」

拓人は小走りで舞の元まで行き、頭を掻きながら笑った。何考えでんだろ、俺……舞と2人きりになると言っても、何かあるわけでもないし……頭の中の妄想を押しやりながらも、片隅で何かを期待する拓人だった。

## 第11話 ケーキは元気の源

舞と並んで家に帰る。こんなにも早くお互いの家を行き来出来る仲になるとは、拓人は思っていなかった。今までの女の子との付き合いは、どれも短期間で終止符を打っていたため、女の子の家に上がるということもなかった。

もしかしたら、今度は俺が舞さんの家にお邪魔してもいいのかな？……拓人の期待は大きく膨らむ。どうしても舞の部屋を想像してしまい、拓人の顔は赤らむ。

えーと、家に帰ったら何しようか？……とりあえずビデオでも観たらいいのかな？

頭の中で色んな想像を膨らませながら、拓人は家の玄関まで辿り着いた。ドアのノブを回すと、カチャツと扉が開いた。拓人の期待は外れて、家には誰かいるようだ。

「なんだか良い香りがするわね」

舞は大きく息を吸い込む。拓人が開けたドアから、甘く美味しそうな香りが漂ってきた。

「……」

玄関には見慣れた男物のスニーカーが脱いであった。涼のスニーカーだ。

舞を案内し台所に行くと、テーブルの上に焼き上がった丸いケーキが置かれ、涼と沙織が側に立っていた。涼はエプロンをつけて、ケーキを覗き込んでいる。

「何やってんだよ、ひとんちの台所で！」

「え？見て分かんない？ケーキ作ってんだよ。後はクリームとフルーツで飾り付け、ここからが肝心なんだよね」

涼はチラリと拓人を見ると、また真剣な表情でケーキに目を落とした。

「兄貴、お帰り、早かったね！あ、舞さんも一緒？こんにちは！」  
沙織は舞に笑顔を向ける。

「こんにちは。玄関からすごく良い香りがしてきたわ」  
舞も笑顔で答える。

「沙織、家に誰もいない時に涼を入れるなって言ってるだろ」

「えゝ何で？」

「何でって……その、密室になるんだから……」

「えゝ！何で？俺、ケーキ作ってるだけだぜ」

涼は顔を上げ、沙織を真似てそう言うと言った。

「何想像してんの？拓人君ってスケベ。そう言うお前こそ、俺達がいなきゃ舞さんと2人きりになってたんじゃねえの？」

涼はククツと笑う。

「……」

拓人の顔は赤くなる。拓人の頭の片隅にあつた密かな期待も妄想も見事に崩れ去った。

「吉澤君、すごいわねえ。なんだか本格的なケーキが出来上がるみたい」

舞は回りの会話を気にすることなく、微笑みながらケーキを見つめた。

「へへ、美味しそうですね？舞ちゃんにも後で味見してもらつよ。

俺、ケーキ屋でバイトしてんだけど、今度店長がオリジナルケーキを作ってみろって言つから、今考えてるとこなんだ」

「涼ちゃんはパティシエ目指してるんだもんね！私、ケーキ大好きだから、すっごく嬉しいな」

涼は頭の出来は良くないけど、昔から器用だもん……涼が手慣れた様子でケーキを飾っていく姿を見て、拓人は思う。沙織と舞に感心され注目を浴びている涼を、羨ましく思う拓人だった。何かに夢中になれること……勉強はその過程でしかない。拓人にはまだ将来の夢や希望がハッキリと決まっていなかった。

涼の作ったケーキは、そのまま店頭に出してもおかしくないような出来映えだった。ケーキは苦手な拓人だが、少しでも食べてみた。甘ったるくなくて、フルーツの味がいかされている。大きなケーキは涼と沙織と舞によって、あっという間に食べ尽くされていった。

「もう最高！また、作ってね涼ちゃん」

「沙織はフォークについた残りのクリームもなめていた。

「もっちゃん！もうちょっとだけ手直ししたいからね。また作りに来るよ」

涼は満足げに答える。

「ホントに美味しいわ」

舞も満面笑顔になっている。ちよつと元気のなかった舞だったが、いつの間にかいつもの舞に戻っていた。甘いケーキは心を幸せ気分にしてくれるのかな？と拓人は思う。

「いくらでも食べられそうね……でも、ちよつと恐い、またニキビが出来ちゃいそうで」

舞がポツリと言った。

「ニキビ？私はニキビより太っちゃうことが恐いよ」

沙織は笑いながら舞の顔に目をやる。

「あつ……」

沙織はフォークを口に入れたまま固まった。舞のおでこと顎と両頬に一つずつのニキビ……

「どうかした？」

舞は、じつと顔を見つめて黙り込む沙織を不思議がる。

「ううん、何でもない。美味しすぎて言葉を失っちゃった！」

沙織はハハハと笑いながら、横目で拓人を見つめた。兄貴気づいてるのかな？

## 第12話 放課後の呼び出し

「兄貴、舞さんのニキビのこと知ってるの？」

涼と舞が帰った後、沙織はさっそく拓人に聞いた。

「ニキビって、舞さんの顔の4つのニキビのことか？」

「そうよ、私今日初めて気づいたんだけど……舞さんっておでこと顎と両頬に一つずつニキビが出来てるでしょ？私ビックリしちゃった。兄貴に冗談で顔に4つニキビがある子と付き合ったらどうなるだろう？って言ったりしてたから」

「そんなこと、別に気にしないでいいだろ」

不安がる沙織を後目に、拓人は落ち着いて答える。最初はニキビのことが気になっていたら拓人だが、舞と付き合っていくうちに気にならなくなっていた。

「兄貴が気にしないのなら良いよ。今まで振られたのは、ニキビとは関係ないのかもしれないもんね」

沙織は笑顔で答えるが、拓人には微妙な答えだった。

「……それって、振られた原因は俺にあるってこと？」

自分に原因があるだけなのに、ニキビのせいにしてたってこと？「違う、違う！兄貴がニキビのことを意識し過ぎるから、上手くいきそうになってもダメになっちゃうってこと。ニキビなんて誰でも出来るものだもん。占いなんて当たらないよ」

「そうだよな……ニキビ占いなんて信じるからダメだったんだよな」

拓人は笑った。ニキビの呪縛から解放される日がやっと来たか！

「そうそう！ニキビ占いのことなんて忘れちゃいなさい」

「って、最初にニキビ占いを教えたのはお前だよな？」

「え？そうだったっけ？」

沙織はとぼけた顔して笑った。ま、いいか……ニキビがあろうとなかろうと、舞さんは舞さんなんだから。このまま何も気にせず付き合っていけばいいんだ。拓人はそう思った。

それから数日後。

学校の昼休みに、拓人は廊下で舞に声をかけられた。あれからも舞は、時折ふつと物思いに沈んだ表情を浮かべたが、他はいつもと変わりなく過ごしていた。季節はもう晩秋、センチメンタルな気分になることもあるのだろう。なんとなく、舞は秋が似合う女の子だなあと拓人は思った。

「あの……放課後、屋上に来て欲しいの」

舞は拓人と向き合い、目を伏せた。

「屋上に？何か用？」

「用っていうか……その、大事な話があつて。まだ、誰にも聞かれたくないから2人きりになりたいの」

舞はチラチラと回りの様子をうかがい、ポツと頬を染めた。廊下は生徒達で溢れ、賑わっていた。

「大事な話……」

拓人の胸がキュンとなった。こ、これって、もしかして告白？……うつむき加減の舞の顔を見下ろしながら、拓人の胸の鼓動が速くなっていた。

「じゃ、私待つてるから」

舞は下を向いたままそう言うと、小走りに去って行った。

「……」

拓人は何も言えず、ただ黙ったまま舞の後ろ姿を目で追っていた。「何、ぼくと突っ立ってんだよ！」

「いてっ」

いきなり頭を小突かれ拓人が後ろを振り返ると、涼が笑いながら立っていた。

「舞ちゃん走って行っちゃったぜ。もしかしてケンカ？」

「そ、そんなんじゃないよ……」

拓人の鼓動がますます高鳴っていく。

「そ？なんか妖しい」

「あ、待てよ」

立ち去ろうとする涼を拓人は呼びとめる。

「何？」

「あの……告られるっていうか、告白された時って、どうしたらいいのかな？」

頬を染め、頭を掻きながら拓人は言った。まともに舞に「好きです」とか言われたら、どうしよう……

「告られる？誰に？」

「もちろん、舞さんに決まってるんだろ」

涼はプツと吹き出して笑った。

「今更何言ってるんだよ。お前等もう付き合ってるのに、告白なんかする必要ねえだろ？」

「え？……でも、俺、舞さんに放課後呼び出されたからさ。なんか、大事な話があるとかで」

「へえ」

涼は腕組みして、拓人を見つめた。

「舞いちゃんって、何事もきちんとしたい性格なんじゃねえの？そうだなあ、お前の気持ちをハッキリ確かめたいとか？お前のことから、まだ舞ちゃんに『好き』だとか『愛してる』とか言ってるさそうだし」

「そ、そんなこと、まだ言うわけねえじゃん！」

拓人は耳まで赤くなる。

「だ、か、ら、だよ。気持ちは相手にちゃんと伝えなきゃな」

「俺の気持ち……」

舞を思う気持ちは、日増に募っている。最近では、学校に行って舞の笑顔を見ることが何よりも幸せだと感じ始めていた。

「拓人君、頑張れ！」

涼は拓人の肩に手を回し、ポンポンと叩いて笑う。

「ま、恋愛に関しては俺の方が先輩だからな、何でも教えてやるよ」  
「って言っても、お前だって沙織としか付き合ったことないくせに」

……沙織には言ってるのか？その……」

「もっちゃん！毎朝、毎晩、ラブコール入れてるし。さよならのキスだって」

「……キス？やっぱ告白されたら、抱きしめてキスとかした方がいいのかな……」

拓人の声は消え入りそうになる。

「ま、その場の雰囲気だね。でも、強引なのはダメだぜ。嫌われちゃうよ、拓人君」

「……そんなことは」

拓人の頭の中は舞とのキスシーンの妄想でいっぱいになる。

「……いい、やっぱお前に聞いたのが間違이었다」

拓人は頭の妄想を追い払い、涼の手を払った。

「一人でじっくり考えるから」

「拓人、考えすぎると失敗するよ！」

後ろで聞こえる涼の声を無視して、拓人は教室に戻って行った。舞の『大事な話』が気になる。午後からの授業は気になって授業どころじゃなくなるだろうなあ……拓人は軽くため息をついた。

### 第13話 友達ニキビ

テーブルの上に無造作に置かれていた携帯電話が鳴った。ソファにもたれ、テレビを観ながらくつろいでいた沙織は、手を伸ばして携帯を取る。発信者は涼だった。

「涼ちゃん？今日バイトじゃなかった？」

時計は午後6時前を指している。涼のケーキ屋のバイトは9時までのはずだった。

「今、休憩中。拓人もう帰って来た？」

涼は、ケーキ屋の外に出て電話をかけていた。外はもう日が暮れてすっかり暗くなっている。

「え？兄貴？まだだよ。そう言えば今日は遅いな」

「そっか、拓人の携帯にかけても出ないんだよ……」

「ふーん、舞さんとどっか行ってるんじゃないの？」

沙織の笑い声が聞こえて来たが、涼はなんとなく気になることがある。

「だよな、2人仲良くどっかに出かけていればいいけど」

「何？兄貴と舞さんなんかあったの？」

「うーん、多分」

「なんか今日の涼ちゃん元気ないね」

「そうか？実はね……」

涼は手短かに、放課後拓人が舞に呼び出されたことを話した。

「俺、バイトあるからすぐ帰ったけどさ、午後からの拓人普通じゃなかったし、屋上に行くときだってガチガチに緊張して、まるで、そつだなあ死刑執行される直前の囚人みたいな歩き方だった」

「涼ちゃん、それ例え悪い」

沙織は笑った。

「でも、なんだか気になるね……」

沙織は笑うのをやめる。拓人は緊張しやすいタイプだから、いつ

も肝心な時にミスってしまふ。『石橋を叩いて渡る』が『石橋を叩きすぎて橋を叩き割ってしまふ』タイプなのだ。それで、壊れた橋の残骸と共に、川の中に墜落する……

「あいつ、舞ちゃんの呼び出し」告白って考えてたけど、普通付き合ってる時に『大事な話』の呼び出しって言ったら、逆の場合想像しねえか？」

「えー！？別れ話の呼び出し？……」

沙織は思わず大声になる。

「拓人が余計に心配すると思って触れなかったけどな」

「そんなこと絶対ないよ！だって2人ともすごく良い感じだったじゃない！」

沙織の声がガンガン響き、涼は携帯を耳から遠ざける。

「……俺もそう思ってるんだけどさ、ちょっと気になったから」

沙織はソファにどっかりともたれかかり、ぼんやりと天井を見上げる。

「別れるなんて絶対ない。……だって、舞さんには4つのニキビが出来ているんだから」

「4つのニキビ？何それ」

「ニキビ占いよ」

沙織は涼ニキビのせいで拓人が振られ続けていることを話す。今までは左頬の振りニキビのせいで振られていたが、今回は四力所にニキビがあるのだから、振られるはずはない。ニキビ占いなど信じない、と言ってはみたものの、いざ窮地に立たされるとニキビ占いを良い方に解釈したいと沙織は思った。

沙織と涼が携帯で話し合っていた頃。

拓人は日の暮れた学校の屋上にいた。空には星が瞬き始め、夜風が冷たく吹き抜けていたが、拓人には気にならなかった。広い屋上の片隅に、一人でペタリと座り込んでいた。もうどれくらいの時間、ここにいるのだろうか？何度か携帯が鳴ったが、拓人は相手も

確認せずにそのまま電源を切った。今は誰とも話したくない、誰とも会いたくない。

「……ニキビ占いの呪いは、まだ消えてなかったんだ……」

拓人は低く呟き、フツと力無く笑ってみる。自分で自分を笑ってみると、急に惨めな気持ちになって、じわじわと涙が溢れてきた。舞に別れを告げられたわけではない。舞はいつものように微笑んだまま、『ずっと、お友達でいてね』と言った。舞のその言葉が拓人の頭から離れなかった。

ずっと友達でいようね！って言うことは、永遠に友達のままそれ以上の関係には発展しないということ。言い換えれば、友達以上の関係にはなりたくない、ということだ。

「そっか、そう言うことか……四力所にニキビがあるってことは、4つのニキビが反応しあって、何の作用も起きなくなるんだ……」

思いもしない、思われもしない、振りもしない、振られもしない、友達のままニキビなんだと、拓人は確信した。

「今日のシチュエーションって、あの日七海ちゃんに初めて振られた時に似ていたな……」

拓人は頬を伝って流れ落ちた涙を手で拭くと、舞との会話を思い出す……

## 第14話 本当の気持ち

舞に自分の気持ちを伝えなければ！舞から告白される前に、自分から告白しよう！

拓人はそう意気込んで、屋上に向かって行った。緊張で胸はバクバク、手に汗握りながら、階段を上がって行った。

広い屋上には、先に来た舞が一人佇んでいた。日暮れ前の緩い日差しが、舞を照らしている。拓人は意を決して、舞に近づいていった。

「五十嵐君」「舞さん！」

2人の声が重なった。

「あつ……先にどうぞ」

舞と向き合った拓人は、高鳴る胸の鼓動を抑えて言った。先に打ち明けたかったが、舞の真剣な眼差しを見て、気持ちが揺らぐ。

「……私、好きな人がいるの」

しばらくして、舞は小さな声でそう言うと、恥ずかしそうにうつむいた。

「え？……」

好きな人？突然の舞の言葉に、拓人はその意味が理解出来なかった。

「転校してきた日から気になっていたんだけど、なかなか気持ちを伝えられなくて……それで、この前五十嵐君と図書館に行った日、五十嵐君の家で相談しようと思ったの」

「相談？」

あの時、舞さんは元気なかつたっけ、家に帰ったら涼と沙織がいて……それで相談する機会がなかったんだ。でも、何の相談？

「五十嵐君なら同じクラスだから、彼のこともよく知っていると思っただから……」

舞の頬がポツと赤くなる。

「彼？」

彼って？……拓人の頭は混乱し始める。

「堂島達也君……」

「達也？達也……」

いつか学校からの帰り、舞は熱心にサッカー部の練習を見ていたことがあった。同じクラスの達也はサッカー部の選手だった。

「……あいつのことが好きなの？」

舞はうつむいたまま、小さく頷いた。拓人の体から一気に力が抜けていった。

「五十嵐君から見て、彼をどう思う？」

舞は頬を染めながら、顔を上げて微笑んだ。

「……2年になって初めてクラスが一緒になって、詳しいことはよく分からないけど、良い奴だと思うよ」

泣き叫びなくなるような気持ちを抑えながら、拓人はそう言つて微笑んだ。俺、何微笑んでいるんだ？気持ちを打ち明けなくていいのか？人に譲つてどうする？

心の中で聞こえてくる色んな声、だが舞のホツとしたような素直な微笑みを目にする何とも言えなくなってしまう。

「よかった……五十嵐君にそう言ってもらって安心したわ。私、彼に打ち明けてみる。ダメかもしれないけど、本当の気持ちは伝えなきゃね」

「あ、うん……そうだね」

拓人はかろうじてひきつった笑みを浮かべた。拓人の本当の気持ちにはまだ打ち明けていない。

「ありがとう、五十嵐君。五十嵐君は転校して来て初めて出来た友達なもの。これからもずっと友達でいてね」

「うん……」

「ホントにありがとう。五十嵐君に打ち明けて気持ちがスッキリしたわ。じゃあ、さようなら」

舞は夕日を浴びた顔を輝かせながら、拓人の元を去って行った。

舞の顔の四つのニキビも赤い夕日を浴びていた。それはまるで、幼い日に見た七海の左頬の振りニキビのようだった。

舞は『さようなら』と言って元気に去って行った。舞とは二度と会えない、永遠の別れをしたような気分だ。拓人は舞に気持ちを打ち明けられなかったばかりか、2人の間にとてつもなく大きな壁を作ってしまった。

拓人は深いため息をついて、夜空を見上げた。晩秋の澄んだ空には、たくさんの星が瞬いている。チラチラと輝く星を眺めていたら、また涙が溢れてきた。

「バカだよなあ、俺……勝手に舞さんが俺のこと好きだと思って、告白してくれるんだと想像して。舞さんは、俺のこと友達としてみてなかったんだ。ただの友達。」

星空が潤んで見える。拓人が悲しみに打ちのめされていようと、例えば誰かが死にそうになっていたとしても、星空はいつも星空のまま。誰の頭上にもいつもと変わらず、何事もなかったかのように綺麗な光りを投げかけているんだ、と拓人は思う。

「おーい！誰かいるのかあ？閉めるぞ！」

感傷的な気分の拓人をよそに、突然、見回りの教師の声が無神経に響いてきた。拓人は手で涙を拭くと、力無くフラリと立ち上がった。

## 第15話 自滅、そして愛と友情

「兄貴！夕ご飯持って来たよ」

ノックの音がして、沙織が夕飯をお盆に乗せて部屋に入ってきた。拓人は両親より遅く家に帰って来て、夕飯も食べずお風呂にも入らないで、そのままベッドの中に潜り込んでいた。

「どうしたの？」

沙織は、布団にくるまっている拓人に目をやり、お盆を勉強机の上に乗せた。

「起きて食べなさいよ。冷めちゃうよ」

「食べたくない」

布団の中からぐもった声で、拓人は答える。

「パパもママも心配してたよ。黙って二階に行っちゃうんだもん」  
「何でもないよ」

拓人は布団から少しだけ顔を出す。両親は共働きで仕事が忙しく、いつも帰りが遅い。ゆっくり夕食を作る時間もないから、今夜もスーパーで買ったお総菜にみそ汁の組み合わせだった。拓人も沙織も小さい頃から、あまり両親に構われていなかった。彼らは本当に心配してくれているのだろうか？お総菜のおかずを見ながら拓人は思う。

どうでもいい、どっちみち食欲は全くなかった。拓人は投げやりな気持ちになり、また頭から布団をかぶった。

「少しでも食べた方がいいよ。食べたなら元気が出るから」

「うっせーな！食べたくないって言うてるだろ」

面倒くさそうに拓人は答える。沙織は、俺と舞さんがどうなったか聞きたがっているんだ、そして涼に報告するに決まっている。人のことからかって面白がってるんだ。そう考えると、だんだんと腹が立つてくる。

「何よその言い方、兄貴のこと心配してるのに！」

沙織も拓人の態度に腹を立て始める。

「ほつといてくれよ！ひとが失恋したのがそんなに面白いのかよ！」

「失恋！？……舞さんに振られたの？」

『振られた』という言葉聞いて、拓人の心がズキンと痛む。

「悪いか、これで14回目だ！涼と笑ってればいいだろ」

「何よ、それ」

「お前はいつもうつさいんだよ！とつとと出てけ！」

拓人の怒りは爆発する。

「出ていくわよ！兄貴のバカ！」

沙織は足早に部屋出ると、バタンツ！と乱暴にドアを閉めた。

「……」

沙織が出て行きシンと静まりかえった部屋で、拓人は次第に怒りが治まり惨めな気持ちになる。

何、妹にあたってるんだ……俺って最低。そつと布団から顔を覗かせ、沙織が持つて来た夕飯に目をやる。温かいみそ汁から立ちのぼる湯気を見つめていると、拓人は自己嫌悪に陥っていった。

沙織は自分の部屋に戻り、ベッド寝ころぶ。久しぶりの拓人とのケンカだった。怒りがまだ治まらない。沙織は、ベッドの上のクッションを掴んだ。

「もう、ムカツク！！兄貴なんか背負い投げで投げ飛ばしてやる！」

沙織はクッションを思いつきり壁にぶつけた。ドスン！という鈍い音と共にクッションが壁から転がり落ちた時、ポケットの携帯が鳴った。涼の着信メロディだった。沙織は身を起こし、すぐに電話に出る。

「涼ちゃん！聞いてよ！兄貴ったら酷いんだから！！」

怒りに任せて大声になる。

「何？どうしたの？俺もそのことで電話したんだけど……」

「兄貴ったらさ……」

涼の声を聞いて落ち着きを取り戻した沙織は、突然悲しい気持ちになる。何であんなに怒ったんだろ？兄貴はきつとものすごく傷つ

いているんだ……沙織の瞳からポタポタと涙が落ちてくる。

「沙織ちゃん？どうかした？」

「……兄貴がね……」

沙織は言葉が続かず、携帯を握りしめたまま声を立てて泣いた。

拓人はそのまま2日間、ほとんどベットの中で過ごした。学校も休み、食事もほとんど喉を通らなかった。沙織は両親に、拓人が風邪をひいて寝ていると言っておいたが、すっかり意気消沈してげっそりとした顔の拓人を見たら、みんな病気だと思うだろう。本当にこのままでは、病気になってしまいそうだった。

そんな土曜日の朝。

晴れた日の休日、拓人は薄暗い部屋で、まだ布団にくるまっっていると、突然部屋のドアが開いた。

「タ・ク・ト・くーん！遊ば！」

布団の中でじっとしている拓人をチラッと見て、涼が部屋に入ってきた。その後から沙織も入ってくる。涼は部屋のカーテンをサッと引き、窓を開け放つ。明るい日差しと冷たい風が部屋の中に入り込んでくる。

「ちよつと寒いけど、すっげー良い天気！遊びに行こう、拓人君。ちっちゃい頃よく誘いに来てやつたろ？お前、友達少ないから他に遊び相手なくてさ」

「うつせえな……」

拓人は布団の中から眠そうな声で答える。涼はツカツカとベットまで来ると、拓人の布団を一気に剥がす。

「うう、寒っ！」

温かい布団を取られ、冷たい風を真に受けた拓人は身震いする。

「何すんだよ」

拓人は、はがされた布団をもう一度かける。

「いつまで布団の中に籠もってんだ。いい加減起きろ」

涼は拓人の寝ているベッドに腰を下ろす。

「二日も学校サボってさ。舞ちゃんも心配してたぜ」

「……」

舞のことを思い出すと、拓人の心はまだ痛んだ。

「……舞さん、何て？」

消え入りそうな声で拓人が言う。

「学校には風邪だって言ってるから、『早く治るといいわねえ』って」

涼は舞を真似てそう言うと言った。

「今の全然似てない……」

「そろそろ立ち直れよ、拓人。ずっと部屋に籠もってるつもりか？」

「……」

「兄貴、この前は怒ってゴメンネ」

沙織は無言の拓人を布団の上から抱きしめた。

「大丈夫だよ。兄貴は一人じゃないから。もし、涼ちゃんと別れることがあったら、私が兄貴の彼女になつてあげるから」

「え？……なんか君たち兄妹、危なくねえか？」

涼はキョトンとして呟く。

「いいの。私、兄貴好きだから！」

拓人は沙織の手を逃れ、そろそろつとベッドから起きあがる。

「変なこと言うなよ……俺も悪かったんだ……ごめんな」

布団を抜け出した拓人を見て、沙織の顔はパツと明るくなる。涼もホッとして微笑む。

「兄貴が大好きなのは、本当だから！さ、起きようよ」

沙織は拓人の腕を引っ張る。

「じゃ、今日は3人でデートに行きますか！」

涼はピョンとベッドから立ち上がった。

## 第16話 悲しみはケーキと共に去って行く

柔らかな陽が降りそそぐ、カフェのテーブルの上に、10個のショートケーキが並んでいる。彩りの良い個性的なケーキ達は、それぞれが自己主張しあっているようだ。

「ねえ、涼ちゃんまだ？」

涼はさつきから熱心に一個一個のケーキを携帯のカメラで撮っていた。

「あ、ちよつと待つて。このケーキって俺が目指しているケーキに近いんだよね。参考にしとかなきゃ」

涼はケーキの角度を変えながら、写真を撮り続ける。沙織はそんなことより、早くケーキを味わってみたいくしょうがない。

「いいのか？ライバル店の写真なんか撮って」

拓人は呆れた様子で見つめる。沙織と涼に連れて来られた先は、カフェ『ラ・メール』だった。舞とのことを思い出すこのカフェは、出来れば来たくない場所だったが、思い出を塗り替えるために、もう一度来てみるのも良いかと拓人は思った。

「そんなの誰でもやってることだろ。いいんだよ、良い物はどんどん吸収していかなきゃな」

「それにしても10個も食うつもりかよ？……」

小さなケーキと言えども、拓人には一個で充分だった。

「よし、完了！」

涼は写真を撮りおえると、携帯をしまう。

「では、そろそろ始めますか？拓人君の『心の傷快復祝い』パーティー！イーイーイ！」

涼は声を上げて片手を上げる。

「イェーイー！」

沙織も両手を上げてはしゃぐ。

「なんだよ、それ……」

拓人は低く呟く。

「拓人、ノリ悪いな。今日はお前が主役なんだから、俺達とことん付き合ってやる」

「って、言いながら、お前等が行きたいところに連れてきただけじゃん」

「ま、それは置いといて、拓人『ラ・メール』って意味知ってる？  
「ラ・メール？フランス語だろ。確か『海』っていう意味」

「おっ、さすが拓人君、頭良いな」

「えっ？そうだったの。だから、ここってブルーが多いのね」

沙織は店内を見回す。海の絵とかブルーの装飾品が飾られ、テールブルクロスも淡いブルーだった。

「で、もう一つ『ラ・メール』には『母親』『お母さん』っていう意味もあるんだよ」

「そうなの？詳しいね、涼ちゃん」

沙織は素直に感心する。飾られた絵をよく見ると、海をバックにした母親らしき女性の姿も描かれていた。

「まあな、お菓子にはフランス語がよく使われつつから」

「お前をれを自慢したかったわけ？」

「話は最後まで聞けよ。それでだ、拓人君に『海』と『母』に抱かれて、心の傷を癒してあげたかった訳だよ。その上に、甘く美味しいケーキで心に元気を与えるという、親友の優しい心遣いがこもってるんだ。拓人、お前は幸せ者だなあ」

「はいはい……」

拓人は軽く息を吐く。

「けど、俺、ケーキあんまり好きじゃないし」

「えー！美味しいよ。兄貴も食べてみてよ。ほった落ちそうになるから」

「あつ、沙織ちゃん、待って」

涼は、目の前のケーキにフォークを突き刺した沙織を制する。

「え？まだなんか話あるの？」

「一応、パーティの主役は拓人君だから」

涼は笑って拓人に目を向ける。

「まずは、拓人君のご挨拶からどうぞ！」

涼は大げさに拍手する。沙織はケーキを気にしながらも、一緒に拍手する。

「兄貴、頑張れ！」

「……別に、そんなのいいよ」

「よくない。お前は俺と沙織ちゃんに心配かけさせて、クリスマスツアーの夢も奪ったんだ。きちんと謝ってもらわなきゃな」

「涼ちゃん、あのツアーもうキャンセルしちゃったの?……」

沙織は少し残念そうな顔をする。沙織も4人で行けるツアーをずっと楽しみにしていた。

「キャンセルはまだ。来週にはキャンセルしなきゃな……拓人、キャンセル料払えよ。ま、残念だけど、来年に期待するとして」

話がそれそうになり、涼は言葉を切る。

「拓人の今の心境を聞きたいんだ。今日は俺と沙織ちゃんは聞き役に回るから、何でも話してみなよ」

「そんなの、ケーキ食べながらもいいじゃない。兄貴は緊張しやすいタイプなんだから、その方がリラックスして話せるよ」

「お前はケーキが早く食べたいだけだろ」

拓人はフツと笑う。沙織はニコリと笑うと、既にケーキを口に運んでいた。

「それでは、ケーキパーティ始めますか。こんな上手そうなケーキが目の前にあつたら気になるもな」

ケーキをほおばり満面笑顔になつて沙織を見て、涼もケーキを掴み、ペロリと食べた。

「拓人君もどうぞ」

涼は口をモグモグさせながら言う。

「……ありがと。2人には感謝してる」

拓人は美味しそうにケーキを食べる2人を見ながらそう言った。

「挨拶はそれだけかよ？」

「沙織と涼とケーキで、なんか元気出てきた」

拓人は目の前のケーキをパクリと一気に食べた。

「兄貴、大丈夫？」

ケーキをほおばり過ぎて喋れない拓人は、沙織を見ながら頭を縦に振った。

「もっと味わって食べ、こんなに上手いケーキなのに」

拓人はどうにかケーキを飲み込むと、コーヒーをゴクゴクと飲んだ。

「……たまにはケーキもいいな」

そう言つと、拓人はもう一個ケーキを食べ始める。

「なんだよ、拓人。もしかしてやけ食いとか？」

涼は黙々とケーキを食べる拓人を呆れて見つめる。

「そうかも。……俺、二日間ベッドの中で色々考えたんだけど、結局俺って今まで一度も自分から人を好きになったことなかったって思う」

「え？そうなの？舞さんのことも好きじゃなかったの？」

沙織は驚いてケーキを食べる手を休める。

「お前等に勝手にセツティングされて、付き合うようになって、それから段々本気で好きになってきたけど、最初は特に何とも思ってた。それより、舞さんの二キビのことが気になったりして、付き合ってみたらどうなるんだろうか？とか、そんなこと考えたりして。今までだって、彼女がいらないことを気にしてばかりでさ、とりあえず彼女がいさえすれば良いみたいなの考えしかなかった。本気の恋っていうか、もっと本気で人を好きにならなきゃダメだね。恋愛なんて焦る必要ないんだよ。誰かにお膳立てされた恋愛じゃなく、俺、運命的出会いを待ってみる」

拓人は一気に喋ると、三箇目のケーキに手を伸ばす。

「おい、拓人食べ過ぎ」

「兄貴、全部食べないでよ」

2人を無視して、拓人は食べ続ける。

「いいじゃん、俺が主役のパーティーだろ？今日は全部涼のおごりな」  
「チッ、お前もしかしてケーキ食べると人変わる？さっきからやけに陽気でよく喋るな……」

「ケーキが兄貴にとっではお酒みたいなものかもね？いいよ、いいよ、今日はじゃん、じゃん食べちゃって」

沙織は明るく笑う。

「涼ちゃん、ケーキ追加注文していい？」

「いいだろ、涼はバイトしてるんだし、ツアー代も払わなくてよくなっただから」

拓人も声を立てて笑いながら、四個目のケーキを目指す。

「……拓人、後でどうなっても知らねえからな」

涼は拓人を睨むと、手を挙げてウェイターを呼んだ。

## 第17話 相思相愛ニキビ

ケーキを焼け食いた拓人は、その夜激しい腹痛に襲われ、一晩中トイレを往復するハメになった。結局、翌日の日曜は一日寝込んでしまうことになった。

しかし、月曜には腹痛も治まり、心の傷も癒えて、学校にも登校出来た。

「五十嵐君、おはよう。風邪は治った？」

何事もなかったかのように、舞は微笑んで拓人に話しかける。舞の姿を見た時、拓人は少しだけ心が疼いた。だが、それはほんの少しで、もうズキンと心が痛むことはなかった。

「あ、うん…… もう大丈夫だよ」

「五十嵐君、痩せたんじゃない？風邪には気をつけてね」

「うん、ありがとう」

舞は笑みを浮かべたまま、去って行く。

その様子をぼんやりと見ていると、教室に飛び込んできた涼にいきなり頭を小突かれた。

「よっ！ケーキの食い過ぎで酷い目にあっただってな」

涼は拓人を見て、ククツと笑う。

「でも、体の中から何もかも出し切って、スッキリした顔してるよな。拓人君、クリスマスケーキは俺が作ってやつから」

「……ケーキの話は当分いい」

拓人は鞆から教科書を取り出す。

「お前、本当に良いのか？」

涼は、親しげに話している舞と達也の方に目を向ける。拓人がいない間、どうやら舞は達也に告白したらしい。2人の雰囲気からして、上手くいっているようだ。

「もちろん。俺、キッパリ諦めたから」

「気持ちも伝えないままで？舞ちゃんのこと嫌いになったのか？」

「いや……今でも嫌いじゃない。けど、恋愛感情じゃない。友達だな。だから、舞さんを困らせたくないし、彼女が幸せそうに微笑んでいればいいんだ」

「そっか。意外と潔いな、感心感心」

「将来のこととかまだハッキリ決めてないけど、俺、大学目指すから、これからはもっと受験勉強に力入れることにする」

「大人になったね、拓人君。当分、彼女はいらないってこと？」

「そういうこと」

拓人は、教科書に目を落として微笑んだ。

まだ何も見えてこない拓人の将来。だけど、今は遠い未来に目を向けるより、今この瞬間を大切にしていこうと、拓人は思った。

それから数日後。

11月も終わりに近づき、すっかり寒くなってきたある朝。拓人はいつもより少し寝坊して目を覚ました。洗面所に行き、冷たい水で顔を洗って眠気を覚ます。

「ううっ、冷てえ！」

バシャバシャと顔を洗ってタオルで顔を拭き、鏡を見つめる。

「……あれ？」

拓人は鏡を見ながら、鼻の頭を触ってみる。ニキビなど滅多に出来ない拓人だが、ちょうど鼻の真ん中に、赤いニキビが出来ていた。「なんだよ、これ……目立つな」

この前ケーキを食べ過ぎたせいだろうか？と拓人が鏡に見入っていると、着替えを済ませた沙織が近づいて来た。

「おはよ！兄貴自分の顔に見とれてるの？」

沙織は笑って鏡の中の拓人を見る。

「違うよ。ケーキ食い過ぎてニキビが出来たんだよ」

「ニキビ？どこ？」

「ここ」

拓人が指さした鼻の頭を、沙織はじつと見つめる。

「そこつて鼻の頭じゃん！？兄貴、スゴイよ！」

「……何？またニキビ占いじゃないだろうな……」

拓人は不吉な思いにかられ、声を落とす。

「大丈夫！今回のはすつごくラッキーなニキビだもん。あのね、鼻に出来たニキビは『相思相愛ニキビ』って言うんだよ」

「相思相愛？」

「そう、だから絶対ベストカップルになること間違いなし！」  
「……」

拓人は、もう一度鏡を見つめる。鼻の頭に一つだけ出来たニキビ。ニキビ占いなんて、もううんざりだと思っていたが、やはり気になる。しかも、今回のニキビはとても縁起の良いニキビのようだ。

ニキビを見ているうちに、拓人はおみくじで大吉をひいたような浮かれた気持ちになっていった。

## エピソード

いつもより遅く起きたうえに、鼻のニキビを気にしていたせいで、拓人は家を出るのがすっかり遅くなってしまった。

慌てて駅の階段を駆け上がり、発車寸前の電車を目指す。

「やばい！遅刻だ」

人をかき分け電車に飛び乗ろうとした時、ドスン！と思いつきり誰かとぶつかった。鞆が飛び教科書やノートが散乱し、拓人もホームに倒れる。

その頃、涼もまた走って駅の階段を駆け上がっていた。と、携帯の着信音が鳴る。沙織からだ。涼は走りながら携帯をとる。

「沙織ちゃん、今ピンチ！後でかけ直すよ」

「待って！こつちも急ぎなんだから。あのね、クリスマスツアーまだキャンセルしないで」

「クリスマスツアー？分かったその話は後で」

涼は息を切らせながら、ようやくホームにたどり着く。

「絶対だよ。兄貴の相手見つかるかもしれないから！」

「え？なんで……」

「だって、兄貴に『相思相愛ニキビ』が出来たんだもん！」

「相思相愛ニキビ？何それ？」

「鼻の頭に出来たニキビのことよ。もし、相手の鼻にもニキビが出来たら、最高のカップル間違いなしね！」

電車に乗ろうとした涼は、ホームにしゃがんで鞆に教科書を詰め込んでいる拓人の姿を発見する。その側には他の高校らしい女生徒の姿があった。2人は謝りながら一緒に教科書を拾っている。

「……ああ、なるほど！そのニキビ、さっそく効き始めたみたいじゃ、結果報告はまた後で」

涼は携帯を切ると、影で2人の様子を見つめていた。

やがて、女子高生は立ち上がり、拓人に頭を下げ、電車に飛び乗った。

「あれ？拓人、何やってんだ……」

拓人は鞆を持ってゆつくりと立ち上がると、電車に乗り込んでいく女子高生の方を見ていた。そして、電車のドアは閉まり、拓人を残し、慌ただしく電車は去って行く。

涼は拓人の元に駆け寄る。

「バカ！何で一緒に乗らないんだよ。せつかくのチャンスなのに」

「え？」

拓人はぼんやりとした眼差しで涼を見る。

「……あつ！？」

「あの電車に乗り遅れたら遅刻だ。お前のせいで俺まで遅刻したじゃないか」

「なんで？」

涼はため息をつく、制服のポケットから生徒手帳を取り出した。「やばいなあ、これで遅刻回数9回目になる。10回溜まると謹慎処分になるんだぜ」

そう言いながら、涼は遅刻マークの押された手帳を拓人に見せる。「謹慎処分が嬉しそうじゃないか。俺なんて、遅刻は初めてだ……」

拓人はポケットの手帳を取り出す。

「あれ？……」

拓人は手帳を見て驚く。それは、いつもの見慣れた白い生徒手帳ではなく、初めて目にする青い手帳だった。

「えっ！？手帳が替わってる……」

「あー！もしかして、それさっきの女の子のじゃないか？見せてみる」

涼は拓人から手帳を受け取り、学校名と名前を確認する。

「海風高校3年3組、柳本 藍、だって。いつこ年上だな。海風高校ってお前が受験を諦めた高校じゃねえか」

拓人は涼から手帳を取る。

「手帳返さなきゃ」

「フンフン、これ絶対チャンスだぜ。運命的出会いだよ、拓人君！」

「運命的出会い？……」

「そう、その鼻の頭のニキビのお導きってやつ」

涼は拓人の鼻を指さして笑う。

「……」

拓人はそつと鼻に触ってみる。

「で、その藍ちゃんってどんな子だった？」

「え？……慌ててたから、顔とかよく見てなかった」

「なんだよ、それ、ちゃんと見とけ。遠くから見た感じじゃスラリと細くて可愛い感じだったけど。お前、やっぱり海風受けときゃ良かったのにな」

「あつ、それより俺の手帳どこいったんだろ？……」

拓人は回りを探してみるが、どこにも落ちていなかった。

「きつと、彼女が持つてるんだよ。今頃、お前のこと考えてるかもな。いいじゃんか、この展開！クリスマスのゲレンデで愛は深まっていくって感じだな」

「……」

涼のからかう声を聞きながら、拓人はもう一度生徒手帳に目を落とす。

その頃、込み合う電車に揺られながら、藍はそつと拓人の手帳を見つめていた。

「五十嵐拓人……」

さっきぶつかった人の手帳よね……格好良くて優しそうな人だった。もう一度、会えたらいいな。藍は電車の窓にうつる自分の顔を見ながら微笑む。

そして、そつと鼻の頭に一つだけ出来たニキビを指で押さえた。

完



## エピソード（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます！

ネタ提供をして下さった快丈風さん、本当にありがとうございます。  
約一ヶ月間、とても楽しく執筆することが出来ました。

結局、拓人は『ニキビ占い』の呪縛から解放されないみたいですが  
(^^;)、きつと幸せな冬を迎えられると思います。

これから寒い冬が訪れますが、心の中はいつもホカホカ温まっていますように……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2733a/>

---

ニキビ

2010年10月8日15時56分発行